

若き研究者へ「論文執筆のすすめ」

山 崎 信 也

若き研究者の方々！ 論文を書く＝大変 とお考えですね。その通り、とても大変です。でも、どんな大変なことも根気よく続けると変化が起きます。そこで、私の体験談から、論文執筆に一步踏み出して頂ければ幸いです。

私が卒後、学会で初めて発表させて頂いた内容は「全身麻酔中の気管チューブ固定法の一工夫」でした。Power Pointのない時代に大変な苦勞で当時の青焼きスライドを作ったものです。当時の主任教授から「学会で発表したものは必ずペーパーにするように！」と指導を受け、卒後2年目で初の論文に挑戦しました。それは仕上がり4ページ程の少ない内容でしたが、文章を作るのに、ワープロ「太郎」（現在の「太郎」の前身）で、種々の論文を参考にしながら3か月ほど要したと記憶しております。しかしながら、9割程が教授に修正され、全く自分の文章が残らなかったのを覚えています。さらに、参考文献引用についても指摘を受け、図書館の医学中央雑誌、バックナンバー、図書館相互利用で何度も調べては書き直しました。教授は忙しい中でも、持参した原稿はいつも速やかに見てくれましたが、そのやりとりは何回も続き、最終的に歯科麻酔学会雑誌に投稿するまで半年ほどかかりました。教授の修正は魔法のようで、修正毎に論文は驚くほど洗練されていきました。さらに、学会の査読からも指摘が入り、私は「論文を書くのは何と大変なことか…」と落ち込みましたが、福島県が生んだ野口英世は、PCのない時代に短い生涯で300編以上の論文を残しています。「諦めず継続するうちに何とかなる…」と自分に言い聞かせました。

その苦勞の結晶が学会雑誌に掲載された感動も束の間、間髪入れずに「希釈式自己血輸血の研究」に関して原著論文を書くことになりました。原著論文は、ボリューム、統計、参考文献、図表などが多く、多大な勞力と時間を費やしましたが、教授からの文章の修正率は7割程になり、次の論文は5割程、次は3割程と、みるみる減っていき、自分の文章が残るようになりました。文章を作る時間も、3か月程から、2か月、次は1か月と、どんどん効率が上がりました。斯くして卒後4年目には、データが揃っている和文の原著論文なら数日で仕上るようになり、調子に乗って年間数編の論文を書きました。

しかし、卒後5年目で、教授の推薦でアメリカのUCLA 医学部麻酔科に留学し、更なる研究に取り組むことになりました。海外では研究の大変さもさることながら、話すこと、読むこと、書くこと、全て英語です。当然、学会発表も英語で組み立てなければならない分、日本語のように短時間では済まなくなりました。また、1つの論文を作るのに3か月ぐらいかかる状態に逆戻り。さらに、UCLAの主任教授にも何度も手直し

を受け、加えて、英語論文は簡単にはアクセプトされず、何度か投稿する雑誌を変えなければならない場合もあります。私は「英語論文を書くのは何と大変なことか…」と更に落ち込みましたが、日本人でも多くの英語論文を残している研究者がいます。「諦めず継続するうちに何とかなる…」と自分に言い聞かせました。参考文献を読むのも、辞書で調べながらなので、最初は1編読むのに1日ほど費やしましたが、連続して英語論文を読むうちに、同じ単語が繰り返し出てくるので、辞書の使用頻度は激減し、連続20編読んだ頃から辞書は殆ど要らなくなり、20分程度で読めるようになりました。同時に、英語論文を仕上げる時間も、最初は3か月、次は2か月、次は1か月と、どんどん効率が上がりました。斯くして、また数年後には、データが揃っている英文の原著論文でも数日で仕上るようになり、調子に乗って年間数編の英語論文を書くようになりました。

確かにいきなり英語論文を数日で仕上げるのは無理でしょうが、物事にはステップがあり、それらを着実にこなしていれば、いつかそのような日が来ます。しかし、一度論文を書いて、その後1～2年と間を開け過ぎれば、せっかくのスキルも振り出しに戻って上達しません。また、若い頃から空いている時間を使って書くという習慣がないと、数年経過してからでは、医局でネットやマンガ、雑談など、遊び時間が固定してしまい、論文執筆という作業が非常に困難になります。したがって、若い頃から空いている時間を使って連続して書き続ける習慣がとても大切です。この仕事上の空いている時間の使い方によって、若い研究者の皆様の将来が決まってくると言っても過言ではありません。

論文を多く投稿すると、講演依頼や依頼原稿が多くなり、講義や書籍の依頼も入ってきます。そんな時も、短時間で文章や図表をまとめるスキルが生きてきます。私は今、正に何かをまとめることで自分の仕事が成立していると実感し、若い頃から論文を書く機会に恵まれたことに感謝しています。また、論文執筆＝勉強であり、多くの文献を参照するうちに、自然と生きた専門知識が身につきます。

以上は私の経験ですが、長く研究されてきた方なら誰でも同じ経験を有するはずで、若い研究者に大切なキーワードは、1)学会発表したものは必ず論文にする。2)若い頃から空いている時間を使って連続して書き続ける習慣をつける。以上の2点を心に留めて頂ければ、必ずや次世代を担う大切な研究者となるでしょう。

(奥羽大学歯学部口腔外科学講座歯科麻酔学分野)